台湾における日本語学習の動機づけと大学の成績との関係
—好成績取得者の動機づけタイプの探索—

堀越和男 / Kazuo Horikoshi
淡江大學日本語文學系　助理教授
Department of Japanese , Tamkang University

【摘要】
本研究以就讀於台灣日文系學生爲對象，分析學習動機之特徵，再進行調查與其大學的成績之間是否有所關連，透過調查與分析後發現以下幾點。也就是說，其學習支撐著對日本以及日本文化的理解和對日本年輕人文化之興趣，證實「自我期許」越強的學生在大學所修的日本語相關科目中越能擁有好成績。

【關鍵詞】
動機、報酬期待型動機、理解享受型動機、自我期許、因素分析

【Abstract】
This study aims to analyze the learning motivation at Taiwanese students who major in Japanese and further verify its relationship with academic performance. A few results are found following an examination and analysis. That is, studying Japanese supports student interest in Japan, Japanese culture, and Japanese youth culture. If a student has a stronger “self expectation”, s/he will be able to achieve a comparatively better performance in Japanese-related subjects at university.

【Keywords】
Motivation, expected reward motivation, pro-understanding motivation, self-expectation, factor analysis

１．はじめに

台湾は地理的にも文化的にも日本に近く、そのような環境が人々に日本と接触する機会を頻繁に与え、また歴史的にも日本文化を受け入れる素地を持ち合わせていることにより、彼らの日本に対する心理的距離は他の諸外国に比べ比較的近く、その中には日本に対し親近感を持つ若者も少なくない。大学の日本語学科の学生に日本語学習のきっかけを尋ねると、大学入学以前に日本の音楽（カラオケ）・ファッション・芸能人・アニメ・漫画・ゲーム等に関し興味を持ったことや、日本への旅行、テレビドラマ等により日本のことに関心を持ったからとの回答がよく聞かれる。確かにこれらが契機となって日本語学習が始まったのだろうが、サブカルチャーを含む日本文化に興味のある学生や日本について感心のある学生ほど日本語学習に意欲的に取り組み、その能力を伸ばし、学業においても良い成績を修める傾向にあるように思う。つまり、このような日本のことを知りたい、楽しみたいという欲求が学習者の内面からわき上がることにより、学習の継続を支える力に転化されていくのではないだろうか。そこで、本研究ではこれを仮説とし、日本語学習の動機づけと大学の成績との関係を検証する。

２．先行研究

本研究について考察するためには、これまでの台湾の高等教育機関における日本語学習者の動機づけについての研究の流れ及び、外国語の学習動機についても触れる必要があろう。まず、前者について取り上げたもので、古い記録としては鮫島（1993）[1]がある。この研究では「就職に有利だから」を選んだ者が最も多く、次いで「外国語を勉強したいから」と、その目的は実用性重視の傾向にあるとしている。また、甲斐（1995）[2]においても「将来の仕事に役立つから」と「日本語はだんだん重要になってきているから」が同率で最も高く、「日本理解に役立つから」がそれに続いており、日本語を学ぶ理由について仕事や日本語の重要性といった将来を見越しての選択が多いと指摘している。

しかし、それらの調査から約 10 年後、学習動機を探索的に調査した堀越（2006）[3]では、日本語学習動機に六つの因子を抽出し、日本文化の理解や大衆文化に対する興味がその動機づけ因子の多くを占め、日本語を仕事に役立てたいという因子はその中で比較的小さいものであると報告している。また、交流協会（2004・2007）[4]でも、日本文化及び日本語への興味、つまり「知識志向」が将来の就職や留学を目的とする「実利志向」を大きく上回っており、国立国語研究所（2005）[5]の調査おいても、「日本語に興味がある」「日本のものが好きだ」という理由が 1 位と 2 位で、「就職に有利だ」というのは 5 位との

[1] 1993年9月、専科学校（日本の「高専」に相当）国際貿易科の5年生180名を対象として調査を行った。

[2] 1994年3月～4月、大学及び専科学校で日本語を学ぶ786人（「第二外国語」科目として学ぶ者も含む）を対象として調査を行った。

[3] 2004年10月、北部・中部の大学8校の夜間コース（いわゆる「進修部」「在職班」「推広部」）で日本語を学ぶ10代から60代までの男女422名（有効回答）を対象として調査を行った。

[4] （2004）は2003年11月～2004年2月に高等教育機関の96名を対象に、(2007)は2006年9月～2007年2月に調査を行った。

[5] 2003年12月～2004年2月に高等教育機関の2,075名を対象として調査を行った。

結果も報告されている。それ以外にも荒井（2006）[6]では、「日本文化（テレビ・映画・アニメ・漫画・音楽・ファッション等）の影響を受けて」が最も多く、「将来の就職のため」が5位であったことを報告している。また、動機づけと学習成果との関係を調査したものには、堀越（2007）[7]があるが、抽出した因子の中で「サブカルチャーに対する興味」が日本語学習の中心的支柱となっていることを明らかにした。

一方、外国語の学習動機についての研究は、Gardner and Lambert（1959）によって「道具的動機づけ」と「統合的動機づけ」というダイコトミーが示され、それがその後の動機研究の基礎となった。道具的動機づけとは目標言語を就職や進学、職業的な成功等、実利的な目的を達成させる一種の道具とする場合の動機づけであり、それに対し、統合的動機づけは目標言語を話す人々に対して好意的な感情を持っていること、さらにその言語社会の一員になりたいと思うことから起こる動機づけである。その後、以上の社会心理学的視点からの研究の他に、1980 年頃から、教育心理学的視点による学習者要因を中心とした研究が次第に盛んになり、学習者の内面の意欲がその行動にどうかかわるのかが注目され、「内発的動機づけ」「外発的動機づけ」という分類が外国語教育においても用いられるようになった。

Deci（1975）は、人がある行動を取る際、その行動以外に何ら明白な外的報酬がないとき、その行動は内発的に動機づけられているとし、その行動の意図が個人の内部にあって、且つその契機となる原因も内部にある場合を内発的動機づけと定義している。つまり、それをすること自体が目的で何かをすること、あるいはそこから喜びや満足感が得られるような行動に関連した動機づけである。それに対し、行動を起こす意図が個人の内部にあっても原因が外部にある場合を外発的動機づけという。つまり、金銭的な報酬や他者に認められること等、何らかの具体的な目的を達成する手段として行う行動に関連した動機づけである。

この「内発」「外発」の動機づけが学習者の内部に如何に形成されるかについては、学習者が帰属する社会的・文化的状況やその言語が持つバイタリティー等によって異なると考えられているが、日本語学習における動機づけ研究が行われるようになった 90 年代の台湾と言えば、民主化を実現させ、安定した高い経済成長を果たし、社会全体がその豊かさを享受し始めた時期であった。それに加え、人や物の往来が盛んになり日本語の人材や日本に関する情報等の需要も更に高まっていった。つまり、90 年代を境とした台湾の日本語教育環境を取り巻く社会的状況の変化は日本語を学ぶ若い世代の動機づけに作用し、概して実利を目的としたものから、広い意味での日本文化に関する知識や教養を身に付けようとするものにシフトし、現在では日本のサブカルチャーに関する興味や関心が彼らの日本語学習を支える大きな要素の一つとなっていると考えられる。

[6] 2005年9月、中部の大学の日本語学科の学生1年生から4年生までの学生208名を対象に調査を行った。

[7] 2006年3月、台湾の大学10校の日本語学科で学ぶ97名（有効回答）を対象として調査を行った。学習成果のデータは「2005年日本語能力試験1級」の結果を使用した。

３．研究の目的

台湾の日本語学科に在籍する学習者の、日本語学習の動機づけの特徴を見極め、それらが大学の成績とどのように関係するのか明らかにし、そこから好成績を修める学習者の動機づけのタイプを見出す。また、本研究の分析結果から外国語学習の動機づけの新たなダイコトミーを提案する。

４．研究の概要

本研究では、以下の「動機づけデータ」と「成績データ」の二種のデータの関連を量的に分析して、日本語学習の動機づけと学習成果との関係を考察し、その実態を明らかにすることを研究の枠組みとする。

4-1. 分析データ

① 動機づけデータ

淡江大学日本語学科に在籍する 1 年生から 4 年生までの学生 836 名（有効回答数）を対象に 2009 年 4 月に日本語学習の動機づけを探るべくアンケート調査[8]を実施、集計し、その結果を「動機づけデータ」とした。

②成績データ

淡江大学日本語学科に在籍する全学生の 97 学年度 2 学期[9]における日本語関連の全必修科目[10]の学期成績をもとに、そこから各学生の履修科目の偏差値の平均を算出、集計し、その結果を「成績データ」とした。

なお、2009 年 4 月に淡江大学で行われた「第 40 届日本語能力試験模擬考試[11]」の成績と「成績データ」との相関を分析したところ、表 1 のように 1、2 年生は比較的高い相関を示したが、4 年生はそれよりも低いことが分かった。つまり、これは低学年では日本語の言語知識そのものが大学の成績に大きく関わるが、学年が上がるとそれだけでなく文学や語学などの専門分野の知識等もそれに含まれることを意味している。

---

[8] アンケートは堀越（2007）に修正を加え、55項目の質問を日本語で作り、それを中国語に翻訳、そして別の者が再度逆翻訳を行い、適切に翻訳されているか確認した。また、質問紙は中国語で、5件法により行った。アンケートの質問については稿末参照。

[9] 台湾の学制では、学年度は8月に始まり、7月に終わる。そのため、2学期の始業は2月下旬で終業は6月下旬となる。本研究では、2009年2月～6月に行われた中間テスト、期末テスト、平常成績を含む学期成績を「成績データ」の基礎資料とする。

[10] 1年生は4科目（37クラス）、2年生は6科目（45クラス）、3年生は5科目（38クラス）、4　年生は3科目（28クラス）を対象とした。なお、1科目につき複数のクラスに分かれ授業が行われるため、クラス数は科目数の数倍になる。

[11]専門教育出版の「第40回日本語学力テスト」で、日本語能力試験（JLPT）に準拠し、第1部門「文字・語彙」、第2部門「聴解」、第3部門「読解・文法」で構成され、日本語の言語知識を問うものである。本研究では、1年生は3級、2年生と3年生は2級、4年生は1級の試験を受験した者を分析の対象とした。なお、3年生は被験者が足りず、分析できなかった。

表１ 被験者の内訳、及び偏差値と日本語能力模擬試験との相関

	日間部	夜間部	不明	男性	女性	不明	相関係数
1年生	150	82	4	44	188	4	.55** (n=92)
2年生	134	59	8	41	152	8	.54** (n=31)
3年生	122	39	0	36	125	0	―
4年生	170	67	1	53	184	1	.38** (n=234)
合計	576	247	13	174	649	13	.43** (n=362)

4-2. 分析の方法

上記のデータをもとに因子分析により日本語学習の動機づけ因子を抽出し、各因子の特性や関連性を調べ、またそれらの因子が大学の成績にどのように影響を及ぼすのか重回帰分析を行い、その因果関係を調べる。

そして、更に学習者の動機づけを因子分析により大きく二つにまとめ、その際の因子得点をもとにクラスタ分析を行い、学習者のタイプを分類し、どのようなタイプの学生が好成績をあげるのか、その二つの動機づけと大学の成績との相関を調べる。

５．分析と考察

5-1. 日本語学習動機の因子の抽出

まず、日本語学習動機 55 項目の平均値と標準偏差を算出し、天井効果（項目 8・10・15・46）と床効果（項目 20・27・37・38・41・43）の見られた 10 項目を以降の分析から除外した。次に残りの 45 項目に対して主因子法による因子分析を行ったところ、固有値の解釈上、9 因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度 9 因子構造と仮定し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い、その結果十分な因子負荷量を示さなかった 9 項目（項目 1・5・12・13・16・28・31・32・51）を除き、再度同様の因子分析を行った。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表 2 に示す。そして、最終的に日本語の学習動機に九つの因子を抽出することができ、回転前の 9 因子で 36 項目の全分散を説明する割合は 62.86%であった。本研究では日本語学習の動機づけ因子をそれぞれ以下のように呼ぶこととする。

第 1 因子（Ⅰ）･･･日本文化理解

日本の伝統文化や歴史、日本人の習慣、価値観、生活様式、行動様式についてもっと知りたい、異文化を理解・体験したいからといった理由。

第 2 因子（Ⅱ）･･･サブカルチャー

日本のファッションや芸能界に関心があり、日本の雑誌や新聞を読みたいから、また日本のインターネットサイトを楽しみたいからといった理由。

第 3 因子（Ⅲ）･･･有能感

より多くの言葉ができることは人に誇れることであり、日本語ができると評価されるからといった理由。

第 4 因子（Ⅳ）･･･日本理解と日台貢献

日本の社会や政治経済、科学技術に関心があり、将来は台日関係に貢献したいといった理由。

第5因子（Ⅴ）･･･ポップカルチャー
　日本の漫画やアニメに興味があり、また日本のTVゲームをしたいからといった理由。
第6因子（Ⅵ）･･･道具
　日本語は仕事やアルバイトで必要であり、将来的に就職(転職)に有利、また会社の昇進のために必要だからといった理由。
第7因子（Ⅶ）･･･日本語の重要性
　日本は隣国であり、日本語は台湾で広く使われ、台湾において重要な外国語だからといった理由。
第8因子（Ⅷ）･･･学位取得
　大学の日本語のテストや卒業の単位として必要だからといった理由。
第9因子（Ⅸ）･･･上昇志向
　日本と関係ある資格証(日本語能力試験や道遊人員甄試)を取得し、将来は日系企業で働きたいから、また日本語を学ぶことで、達成感や充実感を感じたい、そして友達より日本語が上手になりたいといった理由。

※　以降、表中等では便宜上それぞれの因子を（　）内のローマ数字で表記する。

表2　日本語学習動機の因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ
4　日本の伝統文化を知りたいから	**.89**	.01	.03	-.10	-.05	.05	-.09	.02	-.06
39 日本人の文化や習慣、生活様式についてもっと知りたいから	**.86**	.02	.04	-.01	-.15	.01	-.02	.02	.05
21 異文化を理解・体験したいから	**.68**	-.03	.09	-.08	-.12	-.03	.15	.02	.10
48 日本の歴史に関心があるから	**.67**	-.14	-.09	.19	.20	.02	-.03	.11	-.10
23 日本人の価値観や行動様式を知りたいから	**.58**	-.03	.04	.25	-.06	.03	.08	-.07	.02
6　日本文学や小説に関心があるから	**.44**	.02	-.13	-.01	.33	.20	-.07	-.07	-.01
26 日本が好きだから	**.42**	.26	.15	-.13	.04	-.09	.02	-.11	.09
17 日本のファッションに関心があるから	-.07	**.97**	.00	.03	-.18	.02	.02	.00	-.05
18 日本の雑誌や新聞を読みたいから	.05	**.78**	-.10	-.04	-.03	-.02	.06	-.02	.18
52 日本のアイドル、また歌手や俳優などの芸能人が好きだから	.08	**.50**	-.01	.03	.13	-.15	.03	.02	.04
50 日本のネットショップで買い物したいから	-.06	**.48**	.10	.04	.12	.14	-.03	.18	-.06
7　日本のインターネットサイトを楽しみたいから	.24	**.47**	.00	-.09	.25	.04	-.04	-.02	.04
11 より多くの言葉ができることは人に誇れるから	.05	-.08	**.74**	-.04	-.03	.11	-.06	.04	.09
2　日本語ができると尊敬(評価される)されるから	.05	.07	**.67**	.16	.00	.01	-.11	.05	-.16
42 日本語ができるとカッコイイから	.00	-.01	**.59**	-.12	.08	-.03	.17	.02	.07
29 日本の政治・経済に関心があるから	.23	.00	-.07	**.64**	-.04	-.02	-.02	.01	-.03
53 産業や経済に関して日本に勝つためには日本語が必要だから	-.19	.01	.05	**.56**	.03	.15	.04	.06	.04

36 将来、台日関係に貢献したいから	.01	-.07	-.02	**.54**	-.01	.05	.04	-.08	.25
34 日本社会に関心があるから	.45	.09	-.10	**.50**	-.03	-.12	.03	.06	.01
45 日本の科学技術に関心があるから	-.01	.01	.10	**.48**	.22	-.02	-.02	-.04	-.03
33 日本の漫画やアニメに興味があるからから	-.01	-.07	-.03	-.02	**.84**	-.08	.07	-.06	.11
25 日本の TV ゲームをしたいから	-.14	.05	.08	.11	**.78**	.00	.00	-.01	-.09
30 英語が苦手だから	-.05	-.04	.01	.03	**.28**	-.06	-.05	.05	.19
40 日本語は会社の昇進のために必要だから	-.01	.01	.02	.11	-.10	**.73**	.00	.00	-.01
47 仕事やアルバイトで日本語が必要だから	.07	.02	-.01	.00	-.04	**.58**	.09	.01	.01
22 就職(転職)に有利だから	.05	-.15	.17	-.12	.07	**.45**	.12	.00	.19
24 日本語は台湾で広く使われている言語だから	.03	.07	.02	-.10	.04	.09	**.78**	-.03	-.10
54 日本語は台湾において重要な外国語だから	-.02	-.02	-.11	.13	-.03	.01	**.70**	.02	.09
19 日本は隣国だから	-.02	.05	.13	.27	.00	.02	**.41**	.01	-.15
49 学校の日本語のテストのため	.04	.00	-.06	-.05	.02	-.01	-.02	**.93**	.13
3 卒業の単位として必要だから	.03	.08	.16	.02	-.08	.01	.00	**.44**	-.16
55 良い成績を取って、両親の期待に応えたいから	-.08	-.04	.15	.08	.00	-.03	.05	**.35**	.27
35 日本と関係ある資格証(日本語能力試験や道遊人員甄試)を取得したいから	.06	.05	-.10	-.06	.10	.10	.02	.14	**.71**
44 日本語を頑張ることで、達成感や充実感を感じたいから	.10	-.07	.29	.09	.03	-.10	-.04	-.12	**.52**
9 友達より日本語が上手になりたいから	-.01	.12	.26	.10	.02	-.03	-.07	-.01	**.45**
14 日系企業で働きたいから	-.09	.15	-.07	.17	-.04	.29	-.11	-.14	**.44**

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ
Ⅰ	—	.57	.20	.44	.41	.05	.21	-.26	.44
Ⅱ		—	.32	.36	.38	.20	.19	-.11	.42
Ⅲ			—	.34	.03	.41	.48	.20	.54
Ⅳ				—	.18	.45	.39	.12	.38
Ⅴ					—	.05	-.02	-.08	-.02
Ⅵ						—	.48	.30	.41
Ⅶ							—	.28	.46
Ⅷ								—	.01
Ⅸ									—

5-2. 九つの日本語学習動機の関連性

アンケート調査の結果より算出された下位尺度の平均値は、日本語学習を支える各動機因子の強度を表すものであるが、まずその平均値と標準偏差（SD）を求め、それらの結果から日本語学習の動機づけとして学習者の学習活動に強く作用するものは何か、また九つの動機因子の相関は何を意味しているのかということについて考察する。

表 3　日本語学習動機の下位尺度間相関と平均値、SD、α 係数

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	平均	SD	α
Ⅰ	—	.57**	.23**	.54**	.35**	.16**	.24**	-.09**	.47**	3.42	0.80	.86
Ⅱ		—	.29**	.41**	.35**	.19**	.23**	.04	.48**	3.44	0.90	.81
Ⅲ			—	.32**	.07*	.43**	.41**	.32**	.51**	2.81	0.88	.71
Ⅳ				—	.23**	.38**	.42**	.15**	.51**	2.44	0.78	.75
Ⅴ					—	.02	.04	-.06**	.08**	3.12	1.26	.77
Ⅵ						—	.48**	.3**	.47**	2.82	0.90	.70
Ⅶ							—	.3**	.37**	3.17	0.88	.71
Ⅷ								—	.17**	2.77	0.95	.60
Ⅸ									—	3.51	0.87	.75

$^{*}p<.05$，$^{**}p<.01$

表 3 の下位尺度の平均値を見ると、まず「Ⅸ上昇志向」が最も高く、次いで「Ⅱサブカルチャー」「Ⅰ日本文化理解」と続き、この三つの因子が日本語学習の動機づけとしては比較的強い。つまり、日本の伝統文化や日本人の習慣、日本のファッションや芸能界に関心があり、日本の雑誌や新聞を読みたいからといった理由や、台湾の大学の日本語学科では日本語能力試験合格を目標に掲げているところが多いが、それを達成するための動機づけが強いことが分かる。また、標準偏差（SD）が最も大きいのは、「Ⅴポップカルチャー」であるが、これは日本の漫画やアニメ、TV ゲームが動機づけとなる場合には個人差が比較的大きいということが言える。

次に下位尺度の相関係数は、各因子間の関連度の強さを表すものであるが、相関係数が高い（r>.4）ものを見てみると「Ⅰ日本文化理解」「Ⅱサブカルチャー」「Ⅳ日本理解と日台貢献」の間、そして「Ⅲ有能感」「Ⅵ道具」「Ⅶ日本語の重要性」の結びつきが強いことが分かった。また「Ⅸ上昇志向」はその全てに比較的強い相関を示しており、その両群の中間に位置していると言えよう。つまり、彼らの日本語学習の動機づけには、日本について理解しよう、日本語で楽しもうとする意識がその根底に流れるものと、何らかの物理的、心理的報酬を得るべく日本語を学ぼうとするものの二つに分けられるのではないだろうか。

5-3. 九つの日本語学習動機が成績に与える影響

本研究で明らかとなった九つの日本語学習動機がどのように大学の成績に影響を及ぼすのか前項で求めた下位尺度得点を独立変数、成績を従属変数として重回帰分析を行った。その結果を表 4 に示す。

成績に対する標準偏回帰係数が有意であったのは、「有能感」「道具」「学位取得」「上昇志向」の 4 つであり、その内「有能感」「道具」「学位取得」が負の値を、「上昇志向」が正の値を示した。この結果から、人から評価されたい、ただ漠然と仕事やアルバイトの道具として日本語を身につけたい、学位をとるために日本語を勉強するという気持ちは学習成果には結びつかず、一方「上昇志向」が強ければ強いほど成績は高くなるといった傾向にある。つまり、将来日系企業で働きたいといった具体的な目標を持ち、日本語能力試験の合格を目

指そうとする意識や日本語学習によって得られる達成感や充実感を感じること、また友達より上手になりたいというライバル意識を持つ学習者ほど大学の成績は高くなる傾向があると言えよう。

表４　重回帰分析結果

項目	β	
Ⅰ日本文化理解	.05	
Ⅱサブカルチャー	-.02	
Ⅲ有能感	-.10	*
Ⅳ日本理解と日台貢献	-.01	
Ⅴポップカルチャー	.04	
Ⅵ道具	-.09	**
Ⅶ日本語の重要性	.02	
Ⅷ学位取得	-.11	**
Ⅸ上昇志向	.36	***
R^2	.11	***

$^{*}p<.05$，$^{**}p<.01$，$^{***}p<.001$
β：標準偏回帰係数

5-4.「報酬期待型動機づけ」と「理解享受型動機づけ」

まず、先に算出された九つの動機づけ因子の下位尺度得点を従属変数に主因子法による因子分析を行ったところ、固有値の解釈上、2 因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度 2 因子構造と仮定し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表 5 に示す。なお、回転前の 2 因子で 9 項目の全分散を説明する割合は 56.9%であった。そして、以上の因子分析の結果から二つの因子を抽出することができたが、その特徴からそれぞれの因子を以下のように呼ぶこととする。

表 5 九つの動機づけの因子分析結果

項目	Ⅰ	Ⅱ
Ⅵ道具	**.75**	-.09
Ⅶ日本語の重要性	**.64**	.01
Ⅲ有能感	**.64**	.03
Ⅷ学位取得	**.59**	-.30
Ⅸ上昇志向	**.50**	.35
Ⅰ日本文化理解	-.13	**.91**
Ⅱサブカルチャー	.03	**.69**
Ⅴポップカルチャー	-.20	**.51**
Ⅳ日本理解と日台貢献	.34	**.47**
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ
Ⅰ	—	.50
Ⅱ		—

第 1 因子･･･報酬期待型動機づけ

日本語の重要性を感じ、将来就職や仕事のため、日本と関係する資格（日本語能力試験等）を取得するために必要な道具として日本語を習得したい、学位を取得したいという理由。また、日本語を身につけることで有能感や達成感、充実感を味わいたいという気持ち。つまり、日本語を学ぶ努力の対価として何らかの報酬を期待する場合の動機づけを指す。

第 2 因子･･･理解享受型動機づけ

純粋に日本や日本文化について知りたい、サブカルチャーやポップカルチャーを楽しみたいという欲求から起こる動機づけを指す。

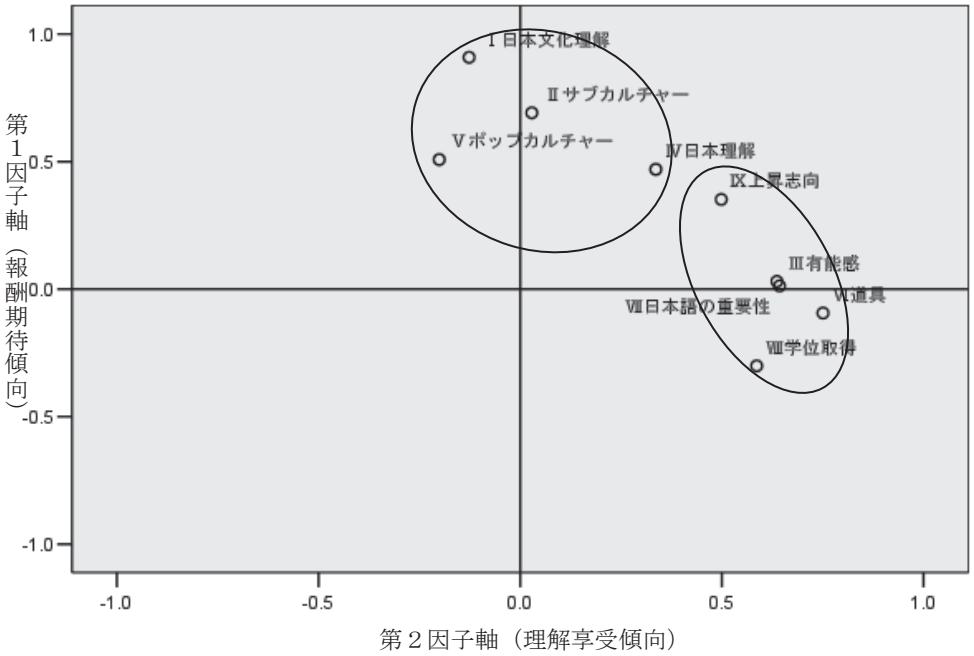

図１　二つの動機づけのプロット

図 1 は因子負荷量をもとに二つの動機づけの特徴を示したプロットであるが、これを見ると、第 1 因子軸の報酬期待傾向が最も強いのは「道具」、つまり仕事や就職のため日本語を学ぼうとする動機づけであり、その対極にあるのが「ポップカルチャー」のアニメや漫画、TV ゲームを楽しみたいという動機づけであることが分かる。また、第 2 因子軸の理解享受傾向が最も強いのは「日本文化理解」で、その対極に位置するのが「学位取得」であることが見て取れる。つまり、大学の日本語のテストのために勉強するという行為は、学習者の日本について理解したり楽しもうとする意識という視点から見ると最も低いということが言える。以上のように統計学的に分析すると、学習者の動機づけは「報酬期待傾向」と「理解享受傾向」の二要因によって捉えることができ、一つは「報酬期待型動機づけ」、もう一つは「理解享受型動機づけ」の二分類で示すことができよう。

しかし、この「理解享受型」「報酬期待型」といった動機づけは、一見すると先行研究で触れた「内発」「外発」の分類と同じようにも見えるが、この二種の分類で大きく異なる点は「有能感」にある。Deci (1975)では、人間は有能感と自己決定の意識を感得しようとするために多くの行動に携わるとし、内発的動機づけの源泉をこれらに求めているが、本研究ではそのうちの有能感を日本語学習の報酬として捉えている。つまり、報酬期待型動機づけに包含される有能感とは、日本語ができるようになって人から評価されること、自らを誇らしく感じられるようになること等を期待して日本語学習を行い、その結果日本語を習得することによって得られる心理的報酬を指す。

5-5. 学習者の五つのタイプと成績との関係

前項の分析から得た因子得点を用い、学習者を動機づけのタイプ別に分類し、どの分類に属する者がよい成績をあげたのか考察する。

まず、グループ内平均連結法によるクラスタ分析を行い、学習動機のタイプを分類する上で最も適当なのは五分類であると判断し、学習者を五つのクラスタに分けた。そして、学習者は第 1 クラスタに 140 名、第 2 クラスタに 147 名、第 3 クラスタに 239 名、第 4 クラスタに 167 名、第 5 クラスタに 137 名となった。

次に、得られた五つのクラスタを独立変数、「理解享受型動機づけ」「報酬期待型動機づけ」の因子得点を従属変数とした分散分析を行った結果、そのどちらにおいても有意な群間差が見られた(前者:$F(3,826)=543.5$,後者:$F(4,825)=564.75$, $p<.001$)。そこで、Tukey の HSD 法（5%水準）による多重比較を行ったところ、「理解享受型動機づけ」は第 1 クラスタ＞第 3 クラスタ＞第 5 クラスタ＞第 4 クラスタ＞第 2 クラスタ、「報酬期待型動機づけ」は第 1 クラスタ＞第 3 クラスタ＞第 4 クラスタ＞第 5 クラスタ＞第 2 クラスタという結果が得られた。

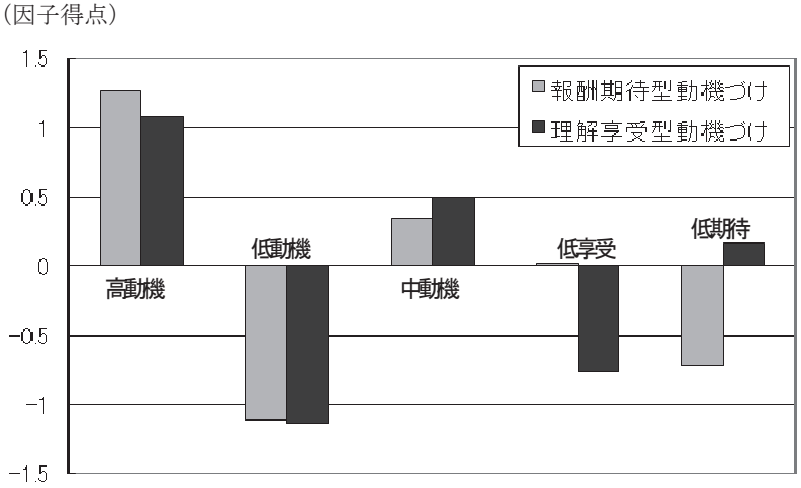

図 2　五群の動機づけの特徴

図 2 は、分析の結果から得られた五群の各得点を表しているが、それぞれ分類されたクラスタの特徴的な部分からその学習動機のタイプを次のように命名する。第 1 クラスタは他のクラスタと比べ「報酬期待型動機づけ」「理解享受型動機づけ」の両者とも最も高いので「高動機」とし、それに分類された学習者を「高動機」群とした。同じく、第 2 クラスタは五つのクラスタの中で両者とも最も得点が低いことから「低動機」群、第 3 クラスタは両者とも中程度なので「中動機」群、第 4 クラスタは「理解享受型動機づけ」が低いので「低享受」群、第 5 クラスタは「報酬期待型動機づけ」が低いので「低期待」群とした。(図中及び以下、「群」を省略)

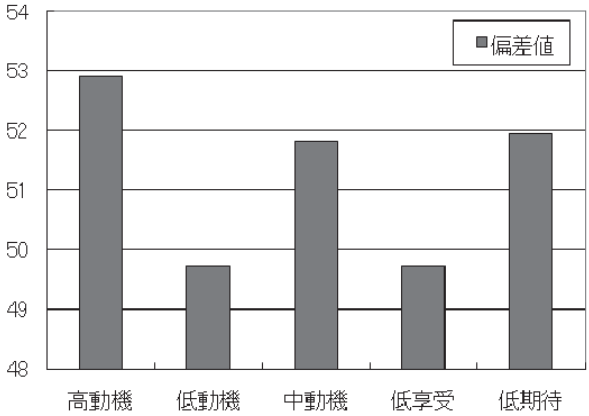

図 3　各群の偏差値（成績）の平均

次にこの五つグループと成績との関係を検討するため、各群に属する学習者の偏差値の平均点を算出したところ、図 3 のようになった。これを見ると、「高動機」の成績は 52.92 ポイント、「低動機」は 49.72 ポイント、「中動機」は 51.83 ポイント、「低享受」は 49.71 ポイント、「低期待」は 51.95 ポイントとなった。

そして、それぞれの群間に差があるのか分散分析を行ったところ、主効果が有意（$F(4, 810)=6.58$, $p<.001$）であったので、多重比較を行った。その結果、表 5 のように「高動機」と「低動機」、「高動機」と「低享受」、「低動機」と「中動機」、「中動機」と「低享受」、「低享受」と「低期待」との間に有意な差が認められた。

表 5　多重比較の結果

	高動機	低動機	中動機	低享受	低期待
高動機	―	**	n.s.	***	n.s.
低動機		―	*	n.s.	n.s.
中動機			―	*	n.s.
低享受				―	*
低期待					―

*$p<.05$,**$p<.01$,***$p<.001$

そして、ここで特徴的なのは、「高動機」「中動機」「低期待」について図 2 の「理解享受型動機づけ」の得点及び図 3 の「成績」は高く、「低動機」「低享受」については同様に両方とも低い値を示していることが分かる。このことは「理解享受型動機づけ」と「成績」との間に何らかの関係があると思われることから、ピアソンの積率相関係数により、その相関を調べてみたところ、「理解享受型動機づけ」の得点と「成績」には弱い正の相関（$r=.21$, $p<.001$）が認められた。なお、「報酬期待型動機づけ」の得点と「成績」にはほとんど相関（$r=.09$, $p<.01$）は見られなかった。つまり、日本や日本文化について知りたい、楽しみたいという意識が強い者ほど大学の成績もそれに比例し良い傾向にあることが分かった。

5-6. 動機づけの学年別差異

最後に動機づけの学年別の差異を明らかにした上で、それが大学の成績にどのような影響を与えるのか分析し、その原因などについて考察する。まず、学年を独立変数、そして 5-1. で得られた九つの日本語学習の動機づけの各因子得点を従属変数として分散分析を行った結果、「有能感」($F(3,813)=4.75$, $p<.01$) と「上昇志向」($F(4,813)=3.60$, $p<.05$) に有意な差が見られた。そこで、Tukey の HSD 法 (5%水準) による多重比較を行ったところ、「有能感」は 1 年生と 4 年生との間 ($p<.01$)、及び 2 年生と 4 年生との間 ($p<.05$) に有意差が認められた。図 4 は「有能感」と「上昇志向」の学年別差を表したグラフである。

つまり、学年別に見ると学習者の動機づけに占める「有能感」の割合は 1・2 年生と 4 年生とでは差があり、それは学年が上がるに従って小さくなることがわかった。これはおそらく低学年ほど日本語能力が低いことから、それによって感じる、ある種劣等感のような充足されない気持ちの裏返しで、低学年では高学年に比べて日本語能力の向上を期待しているからではないかと考えられる。しかし、表 6 を見ると、1 年生では「有能感」の標準偏回帰係数は有意ではなく、また 2 年生は有意ではあるが、成績には負の影響を与えており、「有能感」を感じたいという気持ちは学年を通して良い影響があるとは言えない。つまり、「有能感」を感じたいという学習者の多くは他者からの評価は得たいが、そのために自らの日本語能力を向上させようと何からの労力を払おうとはしていないということが言えよう。また「上昇志向」については、2 年生と 4 年生との間に有意差 ($p<.01$) が認められ、その割合は 2 年生が最も大きく、次いで 1 年生、3 年生、そして 4 年生の順になることが分かった。おそらく 2 年生という時期は大学の生活にも慣れ、親しい友達や学習上のライバルも現れ、3 年次には日本に留学に行くことが決定している者もおり[12]、また日本語能力試験など日本語学習に対する目的も定まってきたことで、その学習に対する積極性は大学生活の中で最も高まる時期だと考えられる。それに対して 4 年生は、本研究の調査から 1 ヶ月程で卒業といった時期であったが、既に大学に在籍している間に受験できる日本語能力試験はなく、専ら関心事と言えば、卒業論文や卒業後の進路、男性の場合は兵役等で、そのような現実の前に立った時、「上昇志向」を持ち日本語の能力を高めたいという気持ちは他の学年に比べると小さくなるのではないだろうか。なお、「理解享受型動機づけと」「報酬期待型動機づけ」の学年間の有意差は見られなかった。

[12] 本研究の調査では2年生の被験者は201名いるが、そのうちの62名が本調査実施の2ヶ月ほど前に3年次に日本の大学に1年間の留学に行くことが決まっていた。

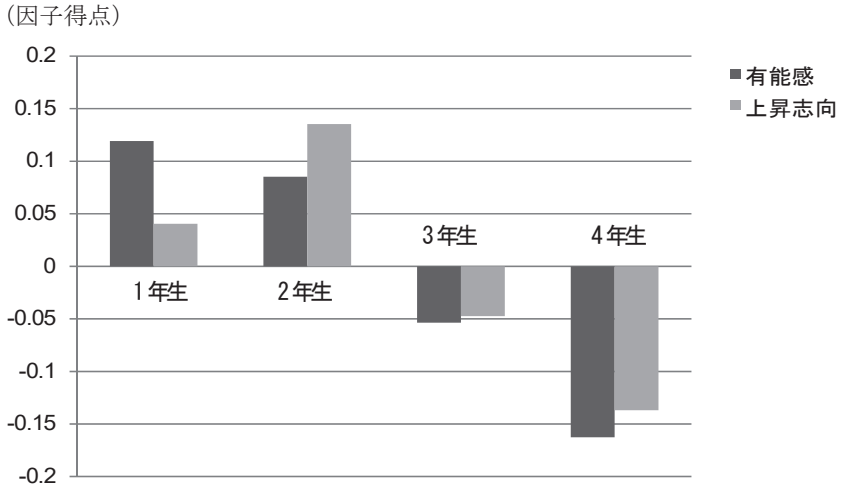

図４　学年別動機づけの差

また、表６で特筆すべき点は、「上昇志向」が成績に与える影響であろう。確かに学年が上がるごとに標準偏回帰係数は低くなり予測率は低下するものの、１年生では（β=.52，p<.001）、２年生では（β=.51，p<.001）、３年生では（β=.46，p<.001）、４年生では（β=.37，p<.001）と各学年を通し、大学の成績に対して正の影響を与えていることが分かる。つまり、将来日系企業で働きたいという具体的な目標や、日本語能力試験等の合格を目指して、クラスメートをライバルに切磋琢磨しながら学び、そこから得られる達成感や充実感を感じられる学習者ほど、学年を問わず好成績に結びつく傾向があると言えよう。

表６　学年別重回帰分析の標準偏回帰係数（β）

項目	１年生	２年生	３年生	４年生
サブカルチャー	-.01	-.05	-.10	-.12
日本理解と日台貢献	.18 *	.01	.12	.06
ポップカルチャー	.23 **	.05	.11	.08
道具	-.39 ***	-.11	.10	-.13
日本語の重要性	.11	.05	-.08	-.01
上昇志向	.52 ***	.51 ***	.46 ***	.37 ***
日本文化理解	-.27 *	.04	-.10	-.03
有能感	-.16	-.28 **	-.17	-.04
学位取得	-.18 *	-.08	-.26 **	-.05
R^2	.190	.175	.176	.073

p<.05，**p<.01，***p<.001

６．まとめと今後の課題

本研究では、大学の日本語学科における日本語学習の動機づけに九つの因子を抽出し、そのうち「上昇志向」が強ければ強いほど、学年を問わず成績は高くなる傾向にあることが明らかとなった。そしてこの九つの動機づけから「報酬期待型動機づけ」と「理解享受型動機づけ」の二つの因子を抽出し、このう

ち「理解享受型動機づけ」と成績との間に弱い正の相関が認められた。このことは「理解享受型動機づけ」の強さと大学の成績とが比例する傾向にあることを示している。つまり、日本語学習が日本や日本文化の理解と日本の若者文化に対する興味に支えられ、日本語能力試験の合格を目指そうとする意識やその学習によって得られる達成感や充実感を感じたいと思う学習者ほど大学の日本語関連科目において好成績を修めるといった傾向にあることが実証された。

本研究の意義としては、一つは上記のように好成績を修める学習者の動機づけのタイプを明らかにしたことであるが、もう一つは、統計学的な手法を用いて、彼らの動機づけに「報酬期待型動機づけ」と「理解享受型動機づけ」というダイコトミーを示し、そのうちの後者と学習成果に正の相関が認められたことであろう。

では、なぜ「理解享受型動機づけ」が強いと学習成果も高くなる傾向にあるのか。おそらくそれは日本語学習に伴う心理的ストレスと関係があるのではないかと思われる。「理解享受型動機づけ」には、「日本文化理解・サブカルチャー・ポップカルチャー・日本理解と日台貢献」の四つの動機づけ因子が含まれるが、これらには日本語を介して「知りたい」「楽しみたい」という気持ちが学習者の心の根底にあり、これに動機づけられて学習が促進的に行われる場合、その欲求が満たされた時の満足感や楽しさは、学習に伴うストレスや第二言語不安を相殺し、学習者は更なる学習へと導かれていくのではないだろうか。もしそうだとすれば、これをもとに教師は学習に伴う学習者の第二言語不安を軽減しながらその効果を高めるための方策を考えることができるようになろう。そこで、日本語学習に伴う第二言語不安がそれぞれの動機づけに如何に関わっているのか、そしてそれが学習成果にどう関係するのか明らかにすることを今後の課題としたい。

付記

本研究は、『國科會處專題研究計畫（「台灣的高等教育機構之日本語學習動機—以主修日文之大學生為對象（Ⅱ）」NSC97-2410-H-032-039)』の成果である。

本論文於 2010 年 4 月 15 日到稿，2010 年 5 月 9 日通過審查。

参考文献

荒井智子（2006）「台湾人日本語学習者の動機づけ－四年制大学応用日本語学科を例にして－」『明海日本語』10・11 合併号、pp.25～35、明海大学日本語学会

甲斐ますみ（1995）「台湾における新しい世代の中の日本語」『日本語教育』85 号、pp.135～150　日本語教育学会

郭俊海・大北葉子（2001）「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」『日本の教育』110 号、pp.130～139　日本語教育学会

交流協会（2004）『平成 15 年度「台湾における日本語教育事情調査」報告書』

交流協会（2007）『台湾における日本語教育事情調査報告書 2006 年度』

国立国語研究所(2005)『平成 16 年度　日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究―台湾アンケート調査集計結果報告書―(日本語版)』

鮫島重喜（1993）「第二外国語履修における日本語学習者の意識－台湾の専科学生のアンケート調査を通して－」『台湾日本語学報 5』pp.81～98

縫部慶憲・狩野不二夫・伊藤克浩（1995）「大学生の日本語学習動機に関する国際調査－ニュージーランドの場合－」『日本語教育』86 号、pp.162～171　日本語教育学会

堀越和男（2006）「台湾の大学の夜間コースにおける日本語学習動機－日本語を専攻する学習者を対象に－」『國文学踏査』第 18 号、pp.280～292 大正大学国文学会

堀越和男（2007）「日本語学習の動機づけとその成果－台湾の大学で日本語を専攻する学習者を対象に－」『台大日本語文研究』第十四期、pp.75～101

Deci,E.L.（1975）*Intrinsic motivation*. New York:Plenum Press.　(E. L. デシ　安藤延男・石田梅男（訳）(1980)『内発的動機づけ・実験社会心理学的アプローチ』誠信書房)

Gardner,R.C.and Lambert,W.E.（1959）. Motivational variables in second language acquisition. *Canadian Journal of Psychology*, 13, 266-272.

資料（アンケートの質問）

1. 因為喜歡學日文
2. 因為會日文能受人尊敬
3. 因為是畢業條件的必修學分
4. 因為想知道日本的傳統文化
5. 因為想跟日本人交流
6. 因為在意日本的文學或小說
7. 因為想樂於瀏覽日本的網站
8. 因為想聽或唱日本的流行歌曲
9. 因為想比同學的日文還要好
10. 因為想以日語來看日本的電視節目或電影
11. 因為比別人懂得較多的語言能得到別人的誇讚
12. 因為想從事日本（日文）相關的研究
13. 因為學習日文比其它的科目還要容易
14. 因為想在日商工作
15. 因為去日本旅遊的時候很方便
16. 因為想交日籍的朋友
17. 因為注意日本的流行資訊
18. 因為想看日本的雜誌或新聞
19. 因為日本是鄰國
20. 因為朋友或家人都在學日文
21. 因為想理解、體驗異國文化
22. 因為對就業或轉行有幫助
23. 因為想了解日本人的價值觀或行動模式
24. 因為日文在台灣廣泛的被使用
25. 因為想玩日本的電視遊樂器
26. 因為喜歡日本
27. 因為被家人或上司等人推薦學日文
28. 因為喜歡學習語學
29. 因為在意日本的政治．經濟
30. 因為不擅長英文
31. 因為日本是先進國家
32. 因為日文是教育的一環
33. 因為對日本的漫畫或動畫有興趣
34. 因為在意日本的社會情況
35. 因為想取得日本相關的資格認証（日本語能力檢定或導遊資格等）
36. 因為將來想對台日關係有所貢獻
37. 因為在讀這一間學校前就一直在學日文了
38. 因為想跟日本人交往或結婚
39. 因為想更了解有關於日本人的文 化、習慣或生活方式
40. 因為要在公司裡升遷需要會日文
41. 因為有日籍的朋友或親戚
42. 因為會日文很酷
43. 因為家人裡有會說日文的人
44. 因為努力學習日文會感到成就感或充實感
45. 因為對日本的科學技術感興趣
46. 因為想去日本留學
47. 因為工作、打工需要用到日文
48. 因為對日本的歷史感興趣
49. 因為是為了學校的日文考試
50. 因為想在日本的網路商店購物
51. 因為想跟同學做好朋友
52. 因為喜歡日本的偶像、或是歌星或演員等等的藝人
53. 因為就產業或經濟上要贏過日本需要日文
54. 因為在台灣日文是重要的外語
55. 因為想得到好成績來回應父母的期